『アルプス建築』第5章「星の建築」に見られる ブルーノ・タウトのユートピア的アイデアと形態群の生成方法 BRUNO TAUT'S METHOD TO GENERATE UTOPIAN IDEA AND FORMS OBSERVED IN THE FIFTH CHAPTER 'STERNBAU' OF "ALPINE ARCHITEKTUR"

赤木良子*, 杉本俊多**
Ryoko AKAGI and Toshimasa SUGIMOTO

This paper has examined and made formal analysis of the sketches included in the 5th chapter of "Alpine Architektur", especially the sketch titled "Grottenstern", by Bruno Taut, and has clarified that its ornamental forms were composed of the historical forms, vegetable forms and crystal forms which are collected and unified into an utopian figure. It is also found how the cosmic ideas of an expressionistic novelist Paul Scheerbart were put into concrete forms and various formal elements and the expressionistic construction were generated by Bruno Taut.

Keywords: Bruno Taut, utopian architecture, glass architecture, Expressionism, Paul Scheerbart

ブルーノ・タウト, ユートピア建築, ガラス建築, 表現主義, パウル・シェーアバルト

1. 序

ドイツ人建築家ブルーノ・タウト(Bruno Taut, 1880-1938)はパウル・シェーアバルト(Paul Scheerbart, 1863-1915)の平和思想から大きな刺激を受け、第一次世界大戦中に『都市の冠¹⁾』(1919年出版)を執筆し、それに続いて1917年から『アルプス建築²⁾』(1919年出版)の執筆に着手し、さらに『都市の解体³⁾』(1920年出版)および『宇宙建築師⁴⁾』(1920年出版)を執筆し、相次いで出版した。これらの作品はユートピア三部作として知られており、中でも『アルプス建築』は、全部で30枚のスケッチがテーマごとに5章に構成されている美しい画集であり、特によく知られている。そこには山岳に点在するガラスの構築物から宇宙的なデザインまで、独特の幻想的な建築形態が展開されている。その仮想的な構造物は非現実的なものだったが、ジードルンクのランドスケープ・デザインなど、その後のタウトの建築設計にもある程度は影を落とすこととなったともされる。

『アルプス建築』についてはこれまで多く論じられてきているところであるが⁵⁾、意外に各スケッチの詳細な形態構成やその生成の仕方についてはほとんど論じられていない。本稿ではシェーアバルトの著作との関連で、タウトがいかに形態イメージを創造していっ

たかに着目し、タウトの多様で幻想的な形態群の生成方法を明らかにすることを試みる。特に、『アルプス建築』第5章「星の建築」の建築的アイデアについては、シェーアバルトの幻想的な小説との関連が注目できるため、本稿で取り上げることとする⁶⁾。また「星の建築」に含まれるスケッチの一枚である「洞窟星」には、数多くの建築物が描かれ、様々な形態がいわば本作品の総集編となって集合しており、非常に独特なスケッチとなっているため、その形態要素と構成について分析・整理を行い、タウトのユートピア的構想について探る。

2. シェーアバルトの宇宙的想像力からの影響

2.1. 『アルプス建築』構想におけるシェーアバルトの影響

ドイツの幻想的な小説家であるパウル・シェーアバルトは、1910～20年代の表現主義、ダダイズムやタウトを始めとする建築家にも多くの影響を与えた人物として知られるが、『アルプス建築』の構想は、特にこの幻想建築詩人と深い関わりを持っている。徹底した反軍国主義者、そして平和主義者であったシェーアバルトは、食物摂取を拒絶するいわゆるハンガー・ストライキを実行し1915年には衰弱死したとされるが⁷⁾、タウトが『アルプス建築』の序文⁸⁾として執

* 広島大学大学院工学研究科社会環境システム専攻
大学院生・修士(工学)

** 広島大学大学院工学研究科社会環境空間部門 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Social and Environmental Engineering, Faculty of Engineering, Hiroshima University, M. Eng.
Prof., Div. of Social Environment and Space, Faculty of Engineering, Hiroshima University, Dr. Eng.

筆しながら掲載されなかった文章には、彼に対する次のような賛辞が述べられている。

「彼（タウト＝著者注）は言う、この仕事の建築家は自分などではない、建築家はわれらが詩人パウル・シェーアバルト、いや結局はシェーアバルトでもないのだ、と。本来ならば、建築においては、理念のみが無条件に人間的なものを通して光り輝くべきなのだから。」

ここには、作品への内的な発動とその契機となったシェーアバルトの思想が示唆されており、この幻想作家がこの作品に大きな影響を与えたことが伺える。

2.2. ユートピア廻文『ガラスの鎖』に見られる影響

『アルプス建築』を書き終わった翌年の1919年11月、タウトは、芸術労働評議会によって開催された「無名建築家展」(1919年4月)から12名の建築家を選出し、ユートピアのアイデアを往復書簡によって交換することを提案した。このサークルは「ガラスの鎖(Die Gläserne Kette)⁹⁾」と呼ばれ、1920年12月まで続くことになる。この往復書簡は、「おそらく20世紀における最も重要な、建築への思索的アイデアのやり取りであろう。¹⁰⁾」とも評され、幻想的なスケッチやアイデアが取り混ぜられた60通の書簡となっている。その内のひとつ、1919年12月26日付けのタウトの廻文「星1920万歳！」¹¹⁾と題されたスケッチ(図1)は、タウトの形態イメージとシェーアバルトとの直接的な関係が知られるものであり、注目される。

この廻文は大小の2つのスケッチと、その余白にびっしりと書かれたメモ書きによって構成されており、メモ書きの中にシェーアバルトの小説『リヴァーナとカイドー¹²⁾』の引用頁¹³⁾が明記されている。当の文章は、やや荒唐無稽な宇宙生命体であるリヴァーナとカイドーが神殿から飛び出して空高く舞い上がり、巨大な神殿全体を見下ろしているシーンを描写したものであるが、その光景についてのシェーアバルトの一言一句がおおよそ忠実に描写されたスケッチとなっている(表1)。

それは中心に位置する神殿であるドームを中心として、銀やガラスの塔、立方体群、雲の環などが層をなして幾重にも取り囲み、円形の構築物となっている。シェーアバルトはこれを「天の花(ケーキの星)¹⁴⁾」と名付けているが、まさにその全体像の遠望を描いたと思わせるタウトのスケッチ(図1右)は花あるいはショートケー

図1 「星1920万歳!」および左上部分の拡大図(右)

キのような面影を見せる。それは星の姿として余りに荒唐無稽なものではあるが、むしろそこに、いかにタウトがシェーアバルトの想像力を直接的な建築形態イメージに転化させていったかが証される。

注目すべきことは、たとえば「ガラスの塔群」(表1-V)について、シェーアバルトでは「煙突のように見える無数の小さな塔」といったイメージが、タウトの手になるとゴシック小尖塔を抽象化したような形となったりする点である。この形は彼の三部作にも度々登場

表1 「天の花(ケーキの星)」と「星1920万歳!」の各部等の比較対照

層	「天の花(ケーキの星)」 (シェーアバルト本文の関係箇所抜粋)	「星1920万歳!」 (タウトのメモ書き)	「星1920万歳!」 (タウト)
I	大きな神殿のドーム、金の巨大な真珠のようなドーム屋根が聳えている；金はあちこちへ蛇のように曲がりくねる線を描き、金の粒、金の輝き、金の浮き彫りとなっている。	金のドーム	
II	(ドームの)開口部を縁取る、金色の星形突起の環 (ドームは)明青色、暗青色の突起の環で縁取られている、縁は広い。 より小さい、先の尖った銀の塔の環が、突起の環を囲む。	明青色、暗青色の突起の環 銀の塔の群れ	
III	明緑色、暗緑色の巨大な立方体群が散らばり—それは星の野のようである—、そして同時に規則的な環を形づく—それはあまりに幅広く、そのようなものとして視野に収めるのがむずかしい。 緑色の尖った、また角の立った大きな立方体群のまわりに、(下段に続く)	明緑色、暗緑色の立方体群	
IV	(続き) 幅広い灰色の雲の環が横たわる。雲の環は内部ではきわめて不規則であって、多くの深い谷があり、雲の灰色はほとんど黒く見える。	雲の環	
V	非常に広いきらきら輝いているガラスタワーがグレーの雲の後ろに上へすべての側で夜天国の中に突き出る。 ガラスの塔は非常に明るく、まるですべて内部から照明されているかのようなである；塔の長方形の角はダイヤモンドのようになり、紅色をなして輝いている。 塔はすべて直角で、幅広い塊状となり、先端は細くはならない；きわめて平坦な屋根の上の先端には、煙突のように見える無数の小さな塔が立ち、基礎壁となる幅広い長方形の塔よりもさらに強くきらめく。	ガラスの塔群	
VI	彼はガラスの塔の背後に、巨大なピラミッドの円環を目にした—それは黄色のトパーズと紫色のアメジスト(紫水晶)が交互につながつた王冠となっていた。 ピラミッドの王冠はガラスの塔のはるか遠くに横たわる。	黄色いトパーズでできたピラミッドの王冠と藤色のアメジスト	
VII	ピラミッドの環は再び真珠の原で囲まれている。 それは黒い瘤状の真珠であり、それらの間には涙粒のような球体をなすバラ色の真珠がきらめいている。	真珠の原：黒色にわずかのバラ色	
VIII	赤い真珠の背後には規則的な間隔をなして丸く続く七つの白い舌が伸びている。その長い、長い先端は高く聳え、尖り靴の先端のようになっている。 その尖った舌先は白ビロードのような白さであり、刺々しく暗赤色の、燃えるような石榴石で覆われている；白色は雪のように光って一帯を支配する—たくさんの石榴石はそうではない。	7つの白い、鳥の嘴のような突起	
IX	舌のそばは星のない真っ黒な夜である	黒い背景	
X	七つの白いくちばし風の突起の先端上には、繊細で背の高い羽毛の花束のように、血のように赤い彗星のしっぽが座している。	血のように赤い彗星のしっぽ	
XI	高く聳えるくちばし風の舌と、はるかに宇宙空間に昇る血の彗星によって、神殿の屋根がつくる王国の全体は、上から見ると天空の花のような形に見える。	ドーム：七五芒星形、彗星のランプ、星の輪舞、霧、... ドームは、一部が透明であり、光を発する小さな星々からなる。	 図1 右拡大図参照

出典：
シェーアバルト本文:Paul Scheerbart, “Liwūna und Kaidōh”, Tredition GmbH, Hamburg, 2011, pp.49-53.
タウト本文および図:Iain Boyd Whyte, “The Crystal Chain Letters”, The MIT press, London, 1985, pp.25-26.

することとなる。「七つの突起」を描いた鳥の嘴のような曲線的な突起状態も同様にスケッチ集に登場しているが、それはタウト独自の解釈だったと考えられる。そのように考えれば、タウトのスケッチ集に様々の形で登場する山岳地帯に散らばる尖塔形や幾何学的なオブジェのモチーフには基本的にシェーアパルトからのインスピレーションが影を落としていたとも考えられる。廻文「星 1920 万歳!」は、まさにタウトがどのようにして『アルプス建築』等のスケッチに登場する特異な建築形態を創作していたかを暗示している。

3. 「星の建築」の分析

3.1. 第 5 章「星の建築」の構成

タウトは「星 1920 万歳!」のスケッチの左下に注書きとして、「私は『アルプス建築』の「星の建築」において同様のものを試した。¹⁵⁾」と記している。全 30 枚からなる画集『アルプス建築』において、第 5 章「星の建築」には、第 26 図「大聖堂星 (Domstern)」、第 27 図「洞窟星 (Grottenstern)」、第 28 図「星のシステム (Sternsystem)」、第 29 図「星雲 (Sternennebel)」、第 30 図「終わり (Ende)」という全 5 枚のスケッチが掲載されている。そこにタウトは壮大で幻想的な宇宙的建築デザインを提示している。その内の第 28 図「星のシステム」(図 2) は惑星系の断面図を描いたもののようであり、立体的なものと思われるが、平面形で比較すると多層構造の表現内容は「星 1920 万歳!」のスケッチとよく似ている。つまり、中心に円形(球形)があり、その周囲を小さな尖塔群が取り巻き、多層化し、そして外周に七つの突起が配される点で共通する。タウトの「同様のもの」という言葉がどのような範囲までを指すものか、詳らかではないが、タウトのメモの文脈および各画像の象徴的な表現から見て、宇宙の神秘的な構造をかつての宗教に代わる精神のよりどころと言う基本的な考え方そのものを指していると思なせよう¹⁶⁾。

また「浮遊建築物のある洞窟星 (GROTTENSTERN mit schwebender Architectur)」と銘打たれた第 27 図は、やや似た円環状の多層構造を持ち、かつ最も多くの形態要素、建造物が描かれ複雑な様相を呈している(図 3)。中心に洞窟のような部分と、そのまわりを様々な建築物が同心円状に並び、さらに外側にある抽象的な形態によって構成された外輪によって取り巻かれた空想の星のイメージを描いたものである。それはさらに多角的なタウトの建築形態イメージの創作方法を知る上で注目される¹⁷⁾。

3.2. 「洞窟星」の構成

「洞窟星」は段階的に層をなす。その構成を模式化した(図 4)。次に各層の形態群について詳細な分析を行った。

図 4 洞窟星の構造概念図

(1) 第 1 層 列柱空間

この惑星の核となる中心部分には奥行きのある空間が小さく描かれており(図 5)、非常にシンプルな、装飾の無い列柱空間として表現されている。これは、古代の神殿や墓所である石窟寺院を想起させる。タウトは『都市の冠』の図版において、古代アッシリアとソロモンの神殿などの復元図を掲載しており¹⁸⁾、この著者である G. ペローと C. シピエの膨大な著作『古代における芸術の歴史¹⁹⁾』には多くの古代石窟墓の地下空間などの図版(図面、スケッチ)および詳細な解説が掲載されている。そしてそこにはタウトの洞窟部分に類似しているものが幾つか見られ(図 6)、タウトがこれらの図版を参照した可能性は十分考えられる。

(2) 第 2 層 結晶風形態の層

星の本体の地殻に相当する球体の部分である第 2 層は、主に多面体と曲面によってランダムに構成されており、抽象的な形態が中心となっている。これらは『アルプス建築』の他のスケッチにも登場する形態要素でもあり、第 7 図、8 図などに見られる、山岳を加工した結晶形態や、第 15 図に見られるような球状形態群と同類のものである(図 7)。ここでは直線的な多結晶体や、通称「砂漠のバラ²⁰⁾」と呼ばれる石膏や重晶石などの鉱物でできた花卉状の形態などをも想起させ、鉱物的な形態(結晶形態)が特徴的と言える。

(3) 第 3 層 塔状建築群

第 3 層は、表 2 上段 A~G に示す塔状の建築形態群が円環をなす。それぞれの塔状建築群の形態について、G を除いて、(i)~(vi) に示したように、各出自(a~f)がおおよそ推測できる。a~d はタウトの『都市の冠』に、また d~f は前節で挙げた C. シピエらの『古代における芸術の歴史』に掲載されている図版である(d は両者に掲載されている)。以下、表 2 をもとに考察を行った。

(i) a は、『都市の冠』においてタウト自身がベルリン工芸博物館図書館所蔵の写真から選んで図版として挙げた、インド西端のグジャラート州パリーターナにあるジャイナ教の寺院の屋根の部分拡大したものである。まるで蕾のような特徴的な膨らみを

図 2 第 28 図「星のシステム」

図 3 第 27 図「洞窟星」全図(左)および中心部(右)

図 5
「洞窟星」
中心拡大図

図 6
ゲルデケカイアシの墓
(古代ペルシャ)

図7『アルプス建築』第7図(左)、8図(中)、15図(右)

- 持つこの屋根は花卉風のモチーフによって全体が装飾されており、この寺院様式の大きな特徴となっていて、Aと酷似している。タウトのスケッチでは花卉がより植物的な印象で描かれている。
- (ii) b も同様にタウトが取り上げたインドのヒンドゥー教寺院であるマドゥライの大ゴブラの図版である。その形態は末広がり、頂部は水平で装飾が並び、多神教であるヒンドゥー教の神々や聖人の像がびっしりと配され賑やかな印象を与えつつ多層のファサードを形成しており、Bに酷似している。タウトのスケッチではこれらの宗教的装飾は、抽象化されたモチーフとして描かれているように見える。また頂部もやや動的に描かれており、植物的印象が加味されている。
- (iii) c も同様に『都市の冠』に掲載されているバンコックの仏塔(ストゥーパ)である。やや丸みを帯びた末広りのファサードを持ち、頂部は先細りとなっている。これも多層の外観を呈し、Cの形態に類似しているが、タウトのスケッチの頂部はかなり特徴的で、ダイナミックな曲線による植物的な形態となっている。
- (iv) d は『都市の冠』に引用された、C. シビエらの『古代における芸術の歴史 II カルデアとアッシリア編』所収の古代アッシリア寺院の復元図である。シンプルなプレート状の層がピラミッド状に積層される簡素でダイナミックな形態で、Dに類似している。
- (v) e は、C. シビエらの『古代における芸術の歴史 II カルデアとアッシリア編』所収の d の復元図の数頁前に掲載されている、古代バビロニアのカルデア寺院(単斜路)の復元図であり、外観は緩やかな斜路が回旋しながら積層を構成している。タウトはこの図版を引用してはいないが、周辺の頁を参照していることは当然考えられ、これもまた、類似した形態を持つ E に影響を与えたものと推定できる。E のスケッチにおいては、頂部に特徴的な曲線状が描かれ独特の雰囲気を持っており、ここにも植物的な加工が見られる。
- (vi) f も同様に C. シビエらの『古代における芸術の歴史 II カルデアとアッシリア編』所収の古代バビロニアのカルデア寺院(複

表2 塔状建築群(上段)および歴史的形態一覧(下段)

(i)	(ii)	(iii)	(iv)	(v)	(vi)	(vii)
A	B	C	D	E	F	G
a	b	c	d	e	f	

a,b,c,d: 『都市の冠』131 頁、40 頁、44 頁、22 頁より

d,e,f: 『古代における芸術の歴史 II カルデアとアッシリア編』

396 頁、392 頁、391 頁より

斜路) 復元図である。ピラミッド状の部分の、水平の通路と斜路によって構成される幾何学的印象は、F のスケッチでは自然に結晶したかのような斜線群へと変形され、鉱物的な結晶形態になったと考えられる。また、頂部には楕円の球体のような形態が両者に見られる。

- (vii) これは、『アルプス建築』全体を通して何度も描かれている尖塔群のユニットであり、ゴシック小尖塔をモチーフにしたタウト自身の創作と考えられる。

(4) 第4層 虚空

ここでは虚空が描かれ、ぼんやりとした陰影がつけられている。上空には形態群の層が浮いており、奇妙な構図となっているが、このようなイメージはシェーアバルトの小説から想を得たと推定され、この構図については後述する。

(5) 第5層 抽象形態による外輪

「浮遊する建築」とされるこの層は再び形態群の環となっているが、第3層に見られた形態より抽象的な形態が登場する。ここで見られる主な形態要素を下表に抽出した(表3)。

表3 第5層の形態要素抽出表

形態要素	アーチ (円弧大)	アーチ (円弧小)	細い火炎状の 形態	細長い針状の 形態	三角形	塔
構成パターン	反復、相似					

また、渦巻くような円弧、爪状、縞状、斑点等の形態が見られるほか、ピサの斜塔を思わせる建築形態(塔)も見られる(表3最右)。

(6) 第6層 宇宙空間、星

ここには尾を引いた彗星や星々が描かれ、惑星の外側の宇宙空間となっている。

3.3. 「洞窟星」に見る建築デザイン的な形態手法

「洞窟星(グロット星)」のタイトルにタウトがグロットの言葉を用いたのは、おそらく18世紀にしばしば造られた庭園内の奇想でグロテスクな洞窟の遊びを連想してのことだったろうと思われる。列柱のある洞窟のまわりはいかにもグロテスクな塊をなし、さらにイボのような塔群が取り巻き、上空にはガラクタのような形態群が漂うという構図全体が、タウトにとってはグロットのアイデアだったものと考えられる。本来のグロットとは洞窟部分だけであるが、タウトはここで内部空間的なイメージを反転させて宇宙空間へと開放したかのようなのである。第28図で描かれた宇宙的なシステムは、ここではちょっとした遊びへと転じたものと言える。

そこで用いられた前述したような多様な形態群には一定の構造が見出される。すなわち、そこにはおよそ歴史的形態、植物的形態、鉱物的形態(結晶形態)という三つの様相が抽出され、かつ相互に関連し合っている。

歴史的形態としては、前節で述べたように、建築的な形態が特に顕著な第3層の塔状建築群を中心として、おもに、東洋の寺院や仏塔などが形態モチーフとして影響を与えていることが明らかとなった。直前に執筆された『都市の冠』には、全部で71枚の図版が掲

載され、それはタウトがこの時期に注目していた都市像や建築形態の参考一覧であるとも言える。従ってこれらの建築的ソースから、タウトが形態的な手がかりを見いだすのはごく自然なことだと思われる。この図版一覧の中には、東洋的なイメージだけではなく中世の都市などヨーロッパ世界のものも多数含まれており、この時期のタウトにとってゴシック形態は重要な象徴でもあるが²¹⁾、その指向はここでは影を潜めている。また、塔状建築群Cなどにも見られたような古代アッシリアのような簡素でダイナミックな形態の影響も見られ、全体的に、脱ヨーロッパ的な思考が見て取れる。

植物的形態については、歴史的形態の加工を通じて現れ出ている。例えばそれは、ジャイナ教寺院の花弁風の装飾が生命感を増して再現された形態、塔の頂部でダイナミックな曲線形態へと変化した形態などである。ここでは具象的な歴史的形態が、宗教的な意味を超えて生命感のある植物的なイメージへと昇華され、より純粋な形態として顕現しており、その底流にはタウト独自の新しい精神思想が感じられる。また、第2層には、第3層へと生長する前段階を想起させるような形態も見られ、大地から建築が生え出る様子を舞台にした『宇宙建築師』にも見られた植物的な生命体としての建築像²²⁾というものがここにも投影されている。

結晶形態は、『アルプス建築』作品全体を通してガラス素材によって示された主要な形態の特徴と言えるが、ここではそれは、キュビズム風の形態感覚で描かれた第2層の鉱物的な形態や、第3層の塔状建築物を加工した部分などに見られた。

タウトの形態ボキャブラリーには以上のような三種の形態要素がつながり合い、また渾然一体となるわけだが、この結晶形態はタウトの表現主義の基盤になるものと言え、19世紀的な歴史主義とも、また後の機能主義の幾何学とも区別されるものであろう。

4. シェーアバルトの空間的想像力の影響

4.1. 円環状の多層構造

「星 1920 万歳!」における「天の花(ケーキ星)」、『アルプス建築』における「星のシステム」、「洞窟星」に共通するものは、円環をなす多重構造である。そういった天体の構造をイメージした空間構成は、中心における星とその造形、惑星、また彗星群などがつくる集成的空間のイメージである。タウトはそのような構造に一種の神秘主義的な一体感を表そうとしていた。そして中心に位置する星はドーム建築や、洞窟であったりして、空洞の空間をなしていた。この空洞を中心に置くという構図は『都市の冠』の設計案に見られるものであり、また馬蹄形ジードルンクとして著名な、中心空間を持つて広がるブリッツ大ジードルンクのような空間構成が連想される。

4.2. 仮想的な天地の構造物の合一感

シェーアバルトは、宇宙や惑星をテーマにした小説を幾つか書いたことでも知られる。その中には独特のアイデアが繰り返し登場するが、そのうちの一つに「二重星」というものがある。これは、1913年に書かれた長編小説『レザベンディオ²³⁾』で中心的テーマとして描かれている。それは、惑星が本体と頭部の二重の構造を持っており、宙を介した外側に形態の環を作っているという奇妙な構図で、タウトの「洞窟星」における塔状建築群のある星本体と宙に浮かぶ外輪の関係性と類似している。この小説は、W. ベンヤミンによっても、シェーアバルトの最も重要な小説と評された人気作であり²⁴⁾、

タウトがこれを読んでいたことは想像に難くない。小説では、「パラス星」という星の上部に頭部構造と呼ばれる部分が雲のように存在し、パラス人たちはその頭部に到達するため巨大な塔を建てる。この頭部と一体となることが、絶対的な超越性との合一であり、それがひたすら目指される。星の上の空虚、そしてその上空に浮遊する奇妙な構造物という、宇宙時代のユートピア的イメージは、タウトに制約のない、多様な新しい形態群を着想させることとなった。

4.3. 視点位置

シェーアバルトの小説『リヴェーナとカイドー』では視点が宇宙を漂うというシーンが多々描かれ、タウトが「星 1920 万歳!」に描いたものも、視点位置が舞い上がり、地上から遠ざかって行き、地上を見る視野が拡大した過程のものだった。『アルプス建築』全体を通してとも言えることであるが、特にこの「洞窟星」を含むスケッチには、それに比べられる独特の視点が設定されている。実は『アルプス建築』の組み立てでもまた、地上の視点から、アルプスを登り、空に舞い上がり、やがて地図的な視点となり、さらに地球的規模で建築を眺めた後、最終章「星の建築」では宇宙からの視点で終わっていた。シェーアバルトの小説から学び取ったと言えるこのような独特のシークエンス的な視覚表現は、ジードルンク等でのタウトの建築デザインに影を落としていたと考えてよい²⁵⁾。

5. 結

以上のように、『アルプス建築』『星の建築』において、シェーアバルトの宇宙的な想像力に同調しつつ、建築家として能力を駆使してユートピア的な構想を描き、そして様々の形態群を創作して散りばめるというタウトの手法を了解できた。その形態は、歴史的な様式を加工することなどにより、植物的、結晶的な形態へと変化させていくものであった。一つのスケッチの中には参照される多様なアイデアや様式、価値観が盛り込まれ、一見、思いつきの遊びのように見えなくもないが、そこにはタウト独特の造形家としての思想が隠されていた。タウトの参照した歴史的な様式は宗教的なものも含まれているが、ここでは新しい、より純粋な精神も求められていた。

ここでは参照される個々の様式や形態における意味は失われている。『アルプス建築』序文でタウトは、「第4部、第5部は新しい、意味に満ちた装飾が育つよう根を植える試みである。今日の世界に全く欠けているのが装飾なのだ。²⁶⁾」と述べている。また「星 1920 万歳!」には、「装飾の問題。私のサイン=言葉は、私自身のヒエログリフとなる。ここから建築思想は発展する。様式を形態から探求する(ヴァン・デ・ヴェルデ)のではなく、世界観、宗教から。今日は、宇宙から。最も理解可能な記号: 星。²⁷⁾」と書き添え、装飾について繰り返し述べているが、純粋な形態への希求は、独特の装飾観となって現れ出ているように思われる。

本稿において、従来、深く分析されることのなかった『アルプス建築』のスケッチを初めて詳細に分析できたが、ユーゲントシュティールから表現主義へと転換する時代にあって、タウトがユートピア的建築構想を通してある種の装飾というものを媒介にして、どのようにして建築像や建築形態が生成されたかということの一端を明らかにすることができたと考ええる。

注

- 1) Bruno Taut, “Die Stadtkrone – mit Beiträgen von Paul Scheerbart, Erich Baron, Adolf Behne”, Verlegt Bei Eugen Dieterichs, Jena, 1919. 日本語訳＝ブルーノ・タウト著、杉本俊多訳、『都市の冠』、中央公論美術出版、2011 年。
- 2) Bruno Taut, “Alpine Architektur”, Folkwang, Hagen, 1919.
- 3) Bruno Taut, “Die Auflösung der Städte oder, Die Erde, eine gute Wohnung; oder auch, Der Weg zur Alpenen-Architektur”, Folkwang, Hagen, 1920.
- 4) Bruno Taut, “Der Weltbaumeister. Architekturschauspiel für Symphonische Musik. Dem Geiste Paul Scheerbarts gewidmet”, Folkwang Verlag, Hagen, i.W., 1920.
- 5) 『アルプス建築』の内容的な検討については、主に以下の様な文献を参照した。
Kurt Junghanns, “Bruno Taut 1880 – 1938”, 2.Aufl., Berlin(W), 1983.
Iain Boyd Whyte, “Bruno Taut and the Architecture of Activism”, Cambridge University Press, Cambridge, 1982. Regine Prange, “Das Kristalline als Kunstsymbol Bruno Tau und Paul Klee”, Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1991.
Winfried Nerdinger, Manfred Speidel, Kristiana Hartmann, Matthias Schirren, “Bruno Taut 1880-1938”, Electa, Milano, 2001. Akademie der Künste, “Bruno Taut 1880-1938”, Akademie der Künste, Berlin, 1980. 土肥美夫著、『タウト芸術の旅 ―アルプス建築への道』、岩波書店、1986 年。マンフレッド・シュパイデル、セゾン美術館編・著、『ブルーノ・タウト 1880-1938』、トレヴィル、1994。武蔵野美術大学タウト展委員会編、『「建築家ブルーノ・タウトのすべて」展図録』、武蔵野美術大学、1984 年。マンフレッド・シュパイデル著、ワタリウム美術館編、『ブルーノ・タウト 桂離宮とユートピア建築』、オクターヴ、2007。なお、本作『アルプス建築』については、2004 年と 2005 年には、復刻版が、ドイツとフランスにおいて相次いで出版されており、本稿では、これらの復刻版の図版を資料として用いた。また、日本語版も補助資料として用いた。ドイツ語版＝Matthias Schirren, “Bruno Taut - Alpine Architektur – Eine Utopie”, Prestel, München, 2004. フランス語版＝Bruno Taut, “Architecture Alpine en cinq parties et trente dessins”, traduit de l’allemand par Daniel Wiczorek, Édition du Linteau, Paris, 2005. ブルーノ・タウト著、水原徳言訳、『タウト全集第六巻 アルプス建築』、育生社弘道閣、1945 年。ドイツ語復刻版において、編者 M.シレンは、本論で扱う「星の建築」についても触れており、ここでもシェーアバルト、G・フェヒナーからの影響やゴットフリート・ゼンパーの天井画なども例に挙げ解説を加えているが、形態的な分析にまでは及んでいない。
- 6) タウトのスケッチとシェーアバルトの小説との関係については、下記の文献に詳しいが、やはり精神思想に重点を置かれており、形態面には立ち入っていない。Ralph Musielki, “Bau-Gespräche. Architekturvisionen von Paul Scheerbart, Bruno Taut und der »Gläsernen Kette«”, Berlin, 2003, pp.104-110.
- 7) シェーアバルトの人物像や作品についての詳細は、『永久機関』、前掲書、245 頁～、訳者あとがき、および、鈴木芳子訳・解説、パウル・シェーアバルト著『虫けらの群霊』、未知谷、2011 年、129 頁～、解説・あとがきに詳しい。
- 8) マンフレッド・シュパイデル、セゾン美術館編・著、前掲書、164-165 頁。引用は一部抜粋である。
- 9) 参照＝Iain Boyd Whyte, “The Crystal Chain Letters”, The MIT press, London, 1985, pp.25-26.
- 10) Dennis Sharp, “Modern Architecture and Expressionism”, George Braziller, New York, 1966, p85, ”probably the most significant exchange of theoretical ideas on architecture this century.”
- 11) “Vivat Stella MDCCCXXI!”, Iain Boyd White, op.cit., pp.25-26.
- 12) Paul Scheerbart, “Liwūna und Kaidōh”, Tredition GmbH, Hamburg, 2011.
- 13) スケッチ右下には、”Scheerbart - Himmelsblüte (Tortenstern) in, Liwuna und Kaidoh, S.82-89”「シェーアバルト ― 天の花(ケーキの星) 『リヴァーナとカイドー』、82-89 頁所収。」とあり、シェーアバルトの小説が引用されていることが分かる。本稿で参照した復刻版(注 12)では頁が変わっており、

文章内容から見て該当箇所は、49～53 頁に当たると推定される。

- 14) ”Himmelsblüte (Tortenstern)”
- 15) 図中左下には、” (NB. Im Sternbau meiner ‚Alpine Architektur‘ habe ich ähnliches versucht.) ”と書かれている。
- 16) 参照＝M.シレンによる分析 Schirren (ed.), op.cit., pp.18 -19.
- 17) 『アルプス建築』に解説をつけて出版したシレンの文章にも詳細な内容は見られない。Schirren (ed.), ibid., p.102.
- 18) タウト著、『都市の冠』、前掲書、22 頁、図版 10: アッシリアの神殿、復元図、24 頁、図版 12: イエルサレム、ソロモン神殿、復元図。
- 19) Georges Perrot, Charles Chipiez, “Histoire de l’art dans l’antiquité, Égypte, Assyrie, Perse, Asie mineure, Grèce, Etrurie, Rome”, Tome I-VIII, Paris, Hachette et Cie, 1882-1903.
- 20) 石膏や重晶石などが自然現象によってバラの花弁に似た結晶になるものと言う。主にメキシコやサハラ砂漠で見られるが、アルプス山脈で産出される、赤鉄鉱にも同様の結晶を作るものもある。
- 21) 『都市の冠』におけるタウトの建築観については、以下を参照されたい。参照＝杉本俊多、赤木良子: 「ブルーノ・タウト著『都市の冠』に見る表現主義的都市像生成の構図と建築思想」、前掲論文。
- 22) 生命体としての建築像について詳細は、参照＝赤木良子、杉本俊多: 「宇宙建築師」に見るブルーノ・タウトのユートピア的建築形態の生成方法」、『日本建築学会計画系論文集』、第 672 号、469-474 頁、2012 年 2 月。
- 23) Paul Scheerbart, “Lesabéndio, ein asteroïden-Roman”, München, G. Müller, 1913. 本論では、日本語版を参照した。参照＝パウル・シェーアバルト著、種村季弘訳、『小遊星物語 付・宇宙の輝き』、平凡社、1995 年。本稿では、原題にならない『レザベンディオ』と表記する。
- 24) ヴェルター・ベンヤミン(Walter Benjamin, 1892-1940) はドイツの思想家、文芸評論家である。彼は『シェーアバルトについて』と『パウル・シェーアバルト『レザベンディオ』』という短い評論を書き、そこでは作品『レザベンディオ』について、「大いなる純粋さと、自覚に満ちた精神的生の果実である」とし、この作品が神話的形式をとって、受胎の精神と理念に満ちていると評した。参照＝ヴェルター・ベンヤミン著、浅井健二郎編訳、『批評の瞬間』、ベンヤミン・コレクション 4、ちくま学芸文庫、2007 年、46～49 頁、656～660 頁。
- 25) 『都市の解体』には住宅地を上空から眺める高度によって、見える印象が異なることを説いている。Taut, “Die Auflösung der Städte“, pp.8-11.
- 26) マンフレッド・シュパイデル、セゾン美術館編・著、前掲書、164-165 頁。
- 27) 図中には、” Frage der Ornamente. Meine Zeichensprache, Hieroglyph sein. Daran Bagedanke. Stil nicht durch Formensuchen (v. d. Velde), sondern durch Weltanschauung, Religion. Heute der Kosmos. Verständlichstes Zeichen: der Stern.”とある。

図版出典

- 図 1: Iain Boyd Whyte, op.cit., p.26.
図 2: Matthias Schirren(ed.), “Bruno Taut Alpine Architektur”, op.cit., p.107.
図 3,5: Ibid., p.103.
図 4, 表 1,3: 筆者作成
図 6: G.Perrot, C.Chipiez, op.cit., tone IV, Judée, p.687.
図 7: Matthias Schirren(ed.), op.cit., pp.49,51,71.
表 2 A～G: 図 3 に同じ
a: 『都市の冠』、前掲書、131 頁、図版 71。
b: 同書、40 頁、図版 34。
c: 同書、44 頁、図版 40。
d: 同書、22 頁、図版 10。原典は、以下の図版であると思われる。: G.Perrot, C.Chipiez, op.cit., tone II, ‘Chaldée et Assyrie’, p.396.
e: Ibid., p.392.
f: Ibid., p.391.

(2012 年 2 月 7 日原稿受理、2012 年 3 月 28 日採用決定)